

若者ことば「鬼」の史的変遷

李 知 殷*

(e-mail : minijolly@naver.com)

<目次>

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1. はじめに | 3. 「鬼」の歴史的变化過程 |
| 2. 「鬼」の辞書の意味 | 4. 若者ことばとしての「鬼」 |
| | 5. まとめ及び今後の課題 |

キーワード：若者ことば(Wakamono kotoba)、歴史的变化(Historical change)、鬼(Oni)、接頭辞(Prefix)、程度副詞(Adverbs of degree)

1. はじめに

言語というものは人間の根源的な活動を支えるものの一つであり、その活動の時は常に新たな表現の場になる(沖森2012)。現代日本語には若者に多用される「若者ことば」がある。「若者ことば」は特定の年齢代が様々な場面で使う語であり、個人の使用や言語意識に差があることから明確な境界をさだめるのが難しい(米川2009)。またその使用期間も臨時的であって、一般語となるものは少ない。このように若者ことばは語の生成・消滅・変化などがみられる言語現象の一つである。

若者ことばに関する従来の研究は主に若者ことばの定義やその特徴に焦点を当てたものがほとんどであり1)、管見の限り、個別語を取り上げ、その意味用法の変化過程を史的観点から考察した研究は非常に少ない2)。そこで、本稿では若者ことばの一つである「鬼」

* 立教大学 日本学研究所、特別研究員、日本語史

1) 代表的に桑本(2003)、米川(2009、2012)などがある。

2) 若者ことばを対象に史的研究を行ったものは、管見の限り、中村(2013)、川口(2017)の研究しか見当たらない。このように、若者ことばは言語の生成・消滅・変化などがみられる言語現象として、現在も進行中の語彙

を取り上げ³⁾、「鬼」の意味機能の歴史的変化過程を追うことにする。さらに若者ことばとしての「鬼」の新しい用法についても明らかにする。

2. 「鬼」の辞書的意味

『日本国語大辞典 第二版』(2003:1296-1297、以下『日国』と略す)には「鬼」のことを次のように記述している。

【I】名詞⁴⁾

- ①人にたたりをすると信じられていた無形の幽魂など。もののけ。幽鬼。
- ②(「隠(おん)」が変化したもので、隠れて人の目に見えないものの意という)死者の靈魂。精霊。
- ③想像上の怪物。仏教の羅刹と混同され、餓鬼、地獄の青鬼、赤鬼などになり、また、美男、美女となって人間世界に現われたりする。また、陰陽道の影響で、人間の姿をとり、口は耳まで裂け、鋭い牙をもち、頭に牛の角があり、裸に虎の皮の褌をしめ、怪力をもち、性質が荒々しいものとされた。夜叉。羅刹。
- ④民間の伝承では、巨人信仰と結びついたり、先住民の一部や社会の落伍者およびその子孫としての山男と考えられ、見なれない異人をさす場合がある。また、山の精霊や耕作を害し、疫病をもたらす人間を苦しめる悪霊をもさす場合がある。
- ⑤(比喩的に用いて)鬼のような性質をもっている人。また、鬼の姿と類似点のある人。

【II】接頭辞

他の名詞の上に付いて、勇猛、無慈悲、異形、巨大などの意を表わす。「鬼男」「鬼将軍」など。

が多い。たとえば、「超」は、現代日本語において、漢字熟語の前項から副詞として定着されているが(中村2013)、今後、衰退していく可能性もあり、新しい意味が付け加える可能性もある。このようなことで、若者ことばの進展を探るためには個別語の史的研究が必要だと思われる。

3) 方韻・小出雅生(2010)は日本語は接辞が発達している言語だとし、「不」「くそ」「鬼」「系」「族」などを取り上げている。

4) 本稿と関連のある部分だけを取り上げる。また、番号は筆者によるものである。

まず、名詞の「鬼」の初出は『日本書記』(720年頃)であり、上記の【I】②に当たるものである。初出当初の「鬼」は無形の幽霊の存在を指す名詞であった。

(1)此れ桃を用て^テ鬼を避ぐ縁なり 『日本書記』 「神代上」(720年頃)

それから、人間の姿をとる怪物のようなものや非凡な才能をもつ異人などを指すようになり、人間などに例える比喩の対象として用いられるようになった。

次に、接頭辞の「鬼」の初出は『室町殿日記』(1602年頃)である。接頭辞用法は上代に初出した名詞用法より遅れて現れた。

(2)信長家中にても鬼紫田と天下の児童迄よびけるは、又無双の勇士なるがゆへなり
『室町殿日記』(1602年頃)

(2)は「柴田」という武将の勇猛さを「鬼」に例えて「鬼柴田」と称したもので、「鬼のように勇猛な者」というふう解釈する。「鬼柴田」は「鬼+【対象】」という形で、対象は名詞相当のものである。ここで、接頭辞については、田村(1995)は「語構成の一つであり、常に他の語に前接して、何らかの意味を付加し、合成語の前項部分を構成する要素のことである。そして、基本的にはそれ自体が単独で用いられることはないが、中には『豆電球』の『豆』や、『鬼監督』の『鬼』などのように本来自立語であったものの意味が転じて、接頭辞となったものがいくつかみられる」と述べている。この説明の通り、「鬼」は本来名詞で自立性が強いものであるが、何らかの影響をうけ、接頭辞としてはたらくようになったと考えられる。

このように通時的にみると名詞から接頭辞に用法が加わられたことが分かる。このような状況をふまえ、本稿では、「鬼」がどのように意味用法の変化をとげているのか、さらに若者ことばとしての「鬼」はいつどのように成立したか、という点に重点をおいて考察を行う。

以上、『日国』の意味記述に基づき、本稿では「鬼」の意味用法を<表1>のように整理し、分析基準とする。

<表1> 本稿での「鬼」の意味用法

【I】名詞	a.本来の意味(無形のモノノケや人間のような姿をしている存在などの) b.比喩の対象
【II】接頭辞	「鬼」+【名詞】

次節では<表 1>の分類に基づいて、「鬼」の意味用法の変化について記述する。

3. 「鬼」の歴史的変化過程

本節では各時代の作品にみられる「鬼」の歴史的変化について考察していくことにする。分析にあたっては<表 1>を分類基準とし、主な資料は『新編日本古典文学全集』（小学館）や「雑誌『太陽』コーパス」（国立国語研究所）などを用いる。具体的な作品名などは【参考資料】及び【作品名】を参考されたい。

I. 上代・中古

「鬼」の初出は上代であり、目にみえないモノノケのような存在を指す名詞であった(初出例は(1)を参照)。中古には和文資料を中心に「鬼(オニ)」で訓まれるものが多数みられる。以下の(3)は男と女が鬼の住むところに入って、女だけが鬼に食わされる場面である。ここでの「鬼」は古い家に住みながら人を食う、人の目に見えない霊物を表す。

(3)ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼あるところもしらで、神さへいとみじうなり、雨もいたう降りければ、あばらなり倉に、女をば奥に押し入れて、男、弓、胡くびを負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。

『伊勢物語』(118頁)

一方、(4)は海で風に流され、知らない国に着いたが、怪物に殺されそうになったという状況で、「鬼」は目に見える怪物のことを表す。

(4)ある時には、風につけて知らぬ国に吹く寄せられて、鬼のやうなるものいで着て、殺さむととき。

『竹取物語』(31頁)

そして、中古の「鬼」は比喩の対象としても用いられるようになるが、「鬼」のもつ性質などを否定的にとらえている。(5)は長門があて宮に渡した手紙の奇怪な文字ということをも「鬼」に例えている。(6)は親は娘に会いにきた、見たことのない男のことを「鬼」に例えて罵っている。(7)は雲居雁と夕霧が口喧嘩をする場面で、雲居雁は常に自分のことを「鬼」とからかったことを言い、それに対して夕霧は「鬼」より怖いと言っている。

- (5)長門「これ、人間に奉れ。殿の大い君の御文といひて、奉りたまへ」といふ。たてきあて宮に奉れば、見たまへば、鬼の目をつぶしかけたるやうなる手にて、言葉かかれば、当て宮おどろきたまひて、あて宮「これはかの君の御分にはあらず。長門が得たるにこそあれ」とて返したまひつ。『うつば物語』 「藤原の君」(186頁)
- (6)この、琴弾きける友だちも、「はや返したまへ」といひけるほどに、親聞きつけて、「いづこなりし盗人の鬼の、わが子をば、からむ」といひて、いで走り追えば、杳をたにもえ履きあへで、逃ぐ。『平中物語』(504頁)
- (7)雲居雁「いづこととおはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、々くはなりはてなむとて」とのたまふ。夕霧「御心こそ鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、え疎みはつまじ」と、何個々ともなう言ひなしたまふもことやましうて、(省略)『源氏物語』 「夕霧」(472-473頁)

また、この時期に『枕草子』から接頭辞的にはたらいしたもの初めて現れる。(8)の「鬼わらび」は名詞「わらび」に「鬼」が前接したもので、「わらび」の大きさを「鬼」の恐ろしさに例えて表している。これについては「わらびの一種で大きくなったもの。鬼わらび・鬼ところとともに、鬼とある名が恐ろしいのである」という注釈(『全集』274頁)もある。

- (8)かなもち、またよろづにおそろし。いきすだま。くちなはいちご。鬼わらび。鬼ところ。むばら。からたけ。いりすみ。牛鬼・碓、名よりも見るはおそろし。『枕草子』一四七 名おそろしきもの(274頁)

最後に、名詞や接頭辞的なもの他、中古にしか見られない「鬼」の形容詞化が1例ある。「鬼しう」という形で、三条の姫君(雲居雁)のことを鬼に例え、鬼のように怖いと言い、その怖さを表す表現である。

- (9)花散里「みな世の常のことなれど、三条の姫君の思さむことこそいとほしけれ。どやかにならひたまうて」と聞えたまへば、夕霧「らうたげにものたまはせなす姫君かな。いと鬼しうはべるさがなものを」とて、夕霧「などでか、それをもおろかにはもてなしはべらん。『源氏物語』 「夕霧」(470頁)

「鬼」は上代にモノノケを表す名詞として初出し、中古になって、「鬼」のイメージに例

えるものや、比喩の対象と直接に結合する接頭辞のようなものが現れる。中古にすでに多様化されたことが分かる。

II. 中世

中世には「鬼」の名詞用法が安定的にみられる時期だと言える。一方、接頭辞は1例のみであり、また「鬼しう」といった形容詞形は1例も見当たらなかった。ここではく表1>の分類基準にしたがって、【I】名詞と【II】接頭辞の二つの用法に分けて例を挙げることにする。

【I】名詞

a. 本来の意味

(10)また云わく、世俗の礼にも、人の見ざる處、或は暗室の中なりとも、衣服等を着換ふる時、また座臥する時にも、放逸に、隱所などをも蔽さず、無礼なるをば、天に慚ぢず、鬼に慚ぢずとて訕るなり。 『正法眼蔵隨聞記』(377頁)

(11)いづれもいでもゆゆしくぞ聞えし。されども、登宣・重綱は、紀信が意には似ずやありけん、白河殿へ参り着きて、「あな怖し。鬼の打替にこそなりたりつれや」とて、わななくわななく車の内より崩れ落つ。 『保元物語』(247頁)

(10)は「死者の靈魂にも恥ずかしく思わない」という、目に見えない存在の前でも恥ずかしくないようにするという意味である。(11)は「鬼の獲物になる」という意味で目にみえる存在のことを表す。

b. 比喩の対象

(12)赤きは酒のどがぞ 鬼とな思しそよ 恐れ給はで われに相馴れ給はば 興かる友と思すべし われもそなたの御姿 うち見にはうち見には 恐ろしげなれど 馴れてつばいは山臥。 『閑吟集』(475頁)

(13)弥陀、疎き仏にいまさず、自らが本有の真性にあり、獄卒、しらぬ鬼に非ず、己が所感の業因にあり。 『中世日記紀行集』 「海道記」(79頁)

(14)法師なれども常に頭を剃らざれば、おつかみ頭に生ひたるに、出丁頭巾ひつこみ、頭

巾のつじを散々に切つて、生ひたる頭を一握みつつ空へ向けてぞつかみ出だしたる。
力士なりになりて、鬼の如くにぞ見えける。 『義経記』(97頁)

(12)は酒で真っ赤になった顔、(13)は地獄の吏、(14)は法師の髪型を「鬼」に例えている。特に(13)は阿弥陀は仏は我らの生まれつき本性にあり、地獄の吏は分別のない鬼ではないというふう解釈され、地獄の吏のことを鬼と比較して、鬼とは違うものであることを強調している。

【II】 接頭辞

上述したように、『日国』では接頭辞の初出を中世とみなす(例(2)を参照)が、本稿ではこれに先たって中古の「鬼わらび」(例(8))という例をあげている。

しかし『邦訳:日葡辞書』(岩波書店,1980:714)には「鬼」の見出し語はあるものの、「悪魔. または、悪魔のように見える恐ろしい形相」という名詞用法しか載っていない。このことから、近世になっても接頭辞の「鬼」は一つの用法としてまだ成立されていないことがうかがえる。ただ、中古・中世に得られた「鬼わらび」「鬼柴田」といった「鬼」の接頭辞的ものは近代以降の「鬼」の接頭辞用法の定着に足場を作ったと考えられる。

III. 近世・近代

近世の「鬼」は前代に引き続き、名詞が主として使われた反面、接頭辞は見いだせなかった。また、近代においても、同様に主に名詞として使われる。「雑誌『太陽』コーパス」(国立国語研究所)の検索結果をみると⁵⁾、明治期は全206例のうち、名詞は204例、接頭辞は1例であり、大正期は全69例のうち、名詞は65例、接頭辞は4例であった。

【I】 名詞

a. 本来の意味

(15)ああ、この三人、きもふとふして甲乙そのけぢめなし。(中略) 鬼かなきかのをんなのこゑに、よぶにまかせて天井へあがる。又しれものとやいはん。

『仮名草子集』 「御伽物語」(483頁)

5) 名詞用法(<表1>に基づく)をみると、明治期は、a. 本来の意味は189例、b. 比喩の対象は15例であり、「鬼々」といった形が1例であった。大正期はa. 本来の意味は58例、b. 比喩の対象は7例であった。

(16)頭のなかが一瞬パツと明るくなつたように、博士はその鬼の影を見詰めて立つた。

雑誌『太陽』 「蛇人」(第十回)三上於菟吉 1925

(15)は三人の勇者は鬼が住むお宮に連られた女を助けに行つた際の場面で、彼らに聞こえる声が連られた女の声かお宮に住む鬼の声かわからないという意味である。(16)は博士の目の前に現れた存在は目にみえる怪物、「鬼」そのものを表す。

b. 比喩の対象

(17)男おきて「たそ」といへば、墓にてあひし女、「さてく御身は聞えぬ事かな。かかる手柄は誰がさする事ぞや。子よひか行夜かとて、たびく来りて見れども、いまだまり給はず。さてくうらみ人候。いまゆきてまり給へ。さなくは御身をうらみん」と、其のからち、鬼のごとくなる。 『仮名草子集』 「御伽物語」(532頁)

(18)「私には那の肥つた姿が鬼のやうに見えますわ。」

雑誌『太陽』 「親兄弟」村山鳥逕 1909

(19)父はすっかり怒つて『あんな鬼のやうな奴等の処へ、どうして娘をやつて置けるものかこちら嘆きと祈りの中に二年間……(省略) 『夫人倶楽部』未詳 野口貞子 1925

(17)は男が墓で会つた女との約束を破つたことから、女は鬼のように怒っているということ、(18)は鬼のように太つた彼の姿ということを表す。(19)は「奴等」を鬼の悪さに例えている。いずれも「鬼」のマイナスイメージに比喩されている。

一方、以下の(20)(21)は「鬼」を良いイメージとして例えられている。(20)は「鬼」の男らしさや強さというようなイメージに例えられたものであり、(21)も強引な、勇ましいという面をもつ「鬼」のように自分の心も強くしたという意味を表す。

(20)とりなり今風の仕出し、つまはづれゆたかにものごしとやかにして、客の気を取り給ひ、いか成る名題大臣も手にいれてまはし、たけき武士のつきあひ、鬼のやう成る男だてをはやらげ、百性に土気をおとさせ、神主に暑鬢をおろさせ、たふとき和向に袴させ、 『浮世草子集』 「野白内証鑑」198頁

(21)都のつとめ姑への孝と私は決心いたしました其決心と同時に私は鬼の如く心を強めました其後は人に向ても涙一滴落しませ、 『女学雑誌』 「片々」未詳 1895

近世以降から「鬼」を良いイメージにとらえる例が現れ、「鬼」に比喻される範囲が拡張されるようになった。

【II】接頭辞

接頭辞は中古・中世に1例ずつみられたものの、近世には見られず、さらに当時の辞書にも接頭辞の用法については触れていなかったということから一つの用法としてまだ成り立っていなかったと上述した。近代になって接頭辞用法が僅かでありながら少し見られるようになる。

以下の(22)(23)は「鬼將軍」、(24)は「鬼総監」という、「鬼+【職業・立場】」といった立場にいる対象を「鬼」に例えたものである。(25)は初出例の「鬼柴田」と似ている形で、「鬼+【名前】」といて、その「名前」の人の行動や性格などを「鬼」に例えたものである。

- (22)そこで是れはどふかと云ふと、昔し加藤鬼將軍が築城の時の設計であつて、
雑誌『太陽』 「前の墨西哥国（承前）」室田義文 1901
- (23)青服の竜騎兵、胸甲騎兵は仏国の花、司令官ペタン鬼將軍の下に弱卒なし、
雑誌『太陽』 「仏蘭西国民に寄す」児玉花外 1917
- (24)研究会を操縦したのは、三島弥太郎子である。彼は、鬼総監といはれた乃父三島通庸とは打つて代つて、
雑誌『太陽』 「貴族院の覆面冠者」水野直子・無腸公子 1925
- (25)其の頃世間から鬼武藤として偉名を歌はれた武藤刑事課長の配下になつたのが、
雑誌『太陽』 「探偵二十年」小泉摠之助 1925

近代の接頭辞用法は、前代の「鬼わらび」「鬼柴田」のように、比喻される名詞相当の対象は「鬼」の性質や行動などのイメージに例えられ、その対象のことを強調するはたらきをする。

また「鬼」のイメージの範囲が拡張されたことは「鬼」の造語力にも影響を与え、使い方が広まるようになる。この点においては、現代語における、特に若者ことばの「鬼」の意味用法をみると明らかになる。

4. 若者ことばとしての「鬼」

本節では「鬼」の歴史的考察をもとに、現代日本語にみられる言語現象の一種とされる若者ことばとしての「鬼」の意味用法を整理する。若者ことばと関連のある接頭辞用法に重点をおいてみることにする。

まず、「鬼」は名詞と接頭辞といった二つの用法を持つ。成立初期は名詞であったが、中古以降から接頭辞的にもはたらくようになる。「モノケ」や「異人」などを表す本来の意味から「鬼のような《対象》」というふうには比喩の対象としてよく使われるようになったことが接頭辞用法につながったと考えられる。

若者ことばにおける「鬼」の接頭辞用法をみてみる。「朝日新聞オンラインデータベース」(2019年1月1日-9月30日)を検索した結果から(26)-(28)のような3例が得られた。(26)の「鬼勝負」、(27)の「鬼レモン」、(28)の「鬼面白い本」であり、「鬼」に「勝負」「レモン」「面白い本」といった名詞相当の《対象》が結合したものである。

(26)名人戦七番勝負の連続出場は6で途切れた。残る1局、負けたほうがリーグ陥落する「鬼勝負」は村川大介十段(28)が孫まこと七段(23)を破り、辛くも残留。同時に孫と鈴木、六浦雄太七段(20)のリーグ初参加組3人の陥落が決まった。(2019年8月18日)

(27)昨年5月から九州で始めた試験販売では、アルコール分3~9%の「はちみつレモン」「定番レモン」「塩レモン」「鬼レモン」の4種類を発売。好評だったため、全国販売に広げることにした。(2019年7月24日)

(28)ブックカバー全面にでかでかと「鬼面白い本を、読んでいます」(2019年8月31日)

しかし、近代以前にみられる接頭辞の使われ方とは異なる様子が見えてくる。近代以前と若者ことばにみられる接頭辞の例を比較してみる。

〈表2〉近・現代にみられる「鬼」の接頭辞の用例

近代以前	鬼わらび・鬼將軍・鬼武藤
現代	鬼勝負・鬼レモン・鬼面白い本

いずれの例は被修飾語が名詞相当のものであることは共通するが、その使い方から異な

り点が生じる。〈表2〉の近代以前の例のなか、「鬼将軍」は「鬼のように{勇猛な}将軍」というふうに「将軍」の性格や行動などを「鬼」のイメージに例えて強調し、さらに評価性をもつ。

一方、現代の例の「鬼面白い本」の場合、「鬼+面白い+本」のように「鬼」が形容詞「面白い」を修飾するか、名詞相当の「面白い本」を修飾するかは不明確であるが、「鬼」が本の面白さの程度が高いことを表す働きをしていることは間違いない。つまり、接頭辞の「鬼」に、これまでと違って、形容詞に前接し、程度性を表す程度副詞用法が新たに現れたと言える。またこのような副詞用法の使い方には評価性は含まれていない。

「鬼」の新用法は、1<表3>のように、1990年代頃、『現代用語の基礎知識』の「若者ことば・流行語」カテゴリーに初めて掲載される⁶⁾。1994年以降からは「鬼+形容詞」形の用例をあげている。用例の中には「うまい」「かわいい」「へん(だ)」のように形容詞の語尾「い」「だ」が省略された形もある。

〈表3〉『現代用語の基礎知識』(1990-2019)による「鬼」の意味及びその例

発行年度	「鬼」の意味	用例
1990	ものすごい	x
1992	強意語	鬼ごみ
1993	強意語	鬼ごみ
1994	強意語	鬼ごみ・鬼うま・鬼かわ・鬼こわ・鬼すご・鬼だる・鬼へん
1995	強意語が同種類もあって、強めたい程度とことばと結び付くと口調によって使い分ける。さらに「超ウルトラばか」などと組み合わせて変化をつける。	鬼かわ
1996-2019	とても。やばいくらい。	あの子鬼かわいい・これ鬼うまい

※〈表3〉について少し触れる。1990年の「鬼」は「ものすごい」という意味を表すが、特に用例はあげていない。そして1992年-1995年の「鬼」は「鬼のように」といった強意語を表す。その中、1992年-1994年には「鬼ごみ」という用例をあげていて、これは「鬼のように混でいる」や「大混雑」という意味を表す。1995年を境に「鬼」の意味に変化がみられ、1996年以降からは「とても・やばいくらい」という意味を表す。さらに本文にも触れているが1994年以降から「鬼+形容詞」形の用例を収録している。

6) 『現代用語の基礎知識』から「鬼」の見出し語が初めて収録されたのは1987年に刊行されたものである。当時の「鬼」は「彼氏がいる。彼氏がない人のそばで、鬼が集まって、のろけ話をわざと聞こえるようにする」という意味を表す。つまり、いたずらをする人を指す名詞で、マイナスイメージを表す比喩の対象として使われた。

以下の〈表 4〉は実際にネットなどで使われる⁷⁾「鬼＋形容詞」形の形容詞部分である。

〈表 4〉「鬼」に後接する形容詞

悪い・ない・切ない・寒い・臭い・硬い・固い・痛い・渋い・忙しい・口惜しい 低い・やばい・しんどい・欲しい・早い・鋭い・親しい・若い・強い

「鬼」に後接する形容詞はすべて「い形容詞」であり、「悪い」「切ない」などマイナス的な語感をもつ形容詞との結びつきが多くみられる。

(29)はゲーム世界のことを描写したもので、レイドック城下町にあるモンスターはとても強いという意味を表す。(31)は主婦の日記の一部であり、朝は息子や夫のめんどうをみることでとても忙しいという意味、(33)は塾の受講生の感想文であり、夏や冬休み中の授業はとても大変だったという意である。また(34)のようにい形容詞の語末「い」が省略された形もみることができる。

(29)レイドック城下町にある井戸の中にいるモンスターは全滅しそうになるくらい鬼強いです。

(<http://dq6ds.web.fc2.com/wiki03.html>)

(30)殴った場合でも……鉄パイプで殴った人が死ぬイメージは簡単につかめるっしょ？

竹刀でさえ、素手で弾く訓練をしたら鬼痛いし。鋼の板を、とか想像もしたくねー……

(<https://www.raitonoveru.jp/howto/h3/509a.html>)

(31)朝は、とにかく忙しかった。長男を通園バスに乗せると、急いで二男と駅に向かい、電車通園。夫は、ただ朝起きて、出来上がっている朝ごはんを食べ、出勤するだけ。(中略)鬼忙しいいつもの朝。

(<http://blog.livedoor.jp/manma77jp/archives/1020456.html>)

(32)ここはハーフパイプがあるんですけど鬼固い。

(<http://kick-the-chicken.jp/shitsunai-snow1.html>)

(33)冬期講習と夏期講習は、鬼しんどいけど、きっと成績が上がってるはずだと思います。

(<http://sakura19.com/voice.html>)

(34)Drop律が鬼低の場合、死ぬ。

(http://tarkarsar.no-blog.jp/tarkarsar/2012/01/ashen_empires_n.html)

7) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(国立国語研究所)からの検索結果である。

以上のことから、現代に入って、接頭辞の「鬼」は名詞のほか、形容詞と結合し、副詞用法という新たな用法を起こして、若者ことばとして現在にまで使われていることがわかった。新用法の発生背景には若者ことばの特徴の一つである、語感のおもしろさや便利さが「鬼」という言葉に浸透したと考えられる。

5. まとめ及び今後の課題

本稿では、若者ことばについての史的研究がなされていなかったことに気づき、若者ことばとされる「鬼」を取り上げ、「鬼」の意味用法に焦点を当ててその歴史的变化を考察した。以下のように纏められる。

上代に「モノケ」を指す名詞から初出した「鬼」は、中古になって鬼の性格、行動などに例えられ、比喩の対象として用いられるようになる。さらに、中古・中世には比喩の対象を「鬼」が直接修飾する「鬼＋【名詞】」という、接頭辞的にも用いられるようになる。

接頭辞用法は1990年代以降、さらに発展し、若者ことばとして「鬼＋【形容詞】」という、感情などを表す形容詞を修飾し、程度副詞のように使われるようになる。

以上、「鬼」の歴史的变化過程を考察した結果、意味用法の変化がみられ、さらに新しい用法が見いだされたことが明らかになった。ただし、今回はその現象が現れたことを述べただけにとどまっておる。今後は調査資料のジャンルを広げて、研究を進んでいきたい。また「鬼」と同じく若者ことばとされる「激」について考察し、若者ことばの歴史的变化のプロセスを築いていきたい。

【参考文献】

- 太田一朗・牧瀬那生(2001)「言語意識からみた若者ことば使用の要因」『鹿児島大学法文学部紀要辞文学科論集』(54) 鹿児島大学、pp.67-83.
- 沖森拓也(2014)『日本語史』、おうおう
- 川口良(2017)「若者ことばにみる主観化について:『大丈夫』の新用法に関して」『文学部紀要』(31) 文教大学文学部紀要委員会、pp.37-57.
- 桑本裕二(2003)「若者ことばの発生と定着について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』(38) 秋田工業高等専門学校、pp.113-120.
- 佐藤 優他(1960-2019)『現代用語の基礎知識』、自由国民社

- 小学館国語辞典編集部編集(2001)『日本国語大事典』第二版、小学館
田村泰男(2005)「現代日本語の接頭辞について」『広島大学留学生センター紀要』15 広島大学留学生センター、pp.25-36.
土井忠生 他(1980)『邦訳:日葡辞書』、岩波書店
中村純子(2013)「『超』の用法」『松本大学研究紀要』(11) 松本大学、pp.205-216.
方韻・小出雅生(2010)「辞書にない日本語—若者言葉を中心に」『日語教育日本学研究』上海:华东理工大学出版社、pp.208-211.
米川昭彦(2009)「集団語の研究 上巻」、東京堂出版
_____ (2012)「学生集団のことばの変化」『日本語学』vol.31-11、明治書院.

【参考資料】『新編日本古典文学全集』(小学館),「歴史コーパス」「雑誌『太陽』コーパス」「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以上、国立国語研究所),「朝日新聞オンラインデータベース」(Japan Knowledge Lib オンラインデータベース)

【作品名】『伊勢物語』『竹取物語』『うつば物語』『平中物語』『源氏物語』『枕草子』『保元物語』『正法眼蔵随聞記』『閑吟集』『中世日記紀行集』『義経記』『仮名草子集』『浮世草子集』(以上、『新編日本古典文学全集』(小学館))

논문 투고 일자 : 2019. 10. 13.
논문 심사 일자 : 2019. 11. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.

<要旨>

若者ことば「鬼」の史的変遷

李知殷

本研究は現代日本語の言語現象の一つである、若者ことばの「鬼」を対象に歴史的变化過程を考察したものである。

「鬼」の変化過程は以下の通りである。

「鬼」の初出は上代であり、形態のない心霊の意味をもつ名詞であった。中古の「鬼」は目にみえる、有形の存在の意味が加わり、意味の拡張が見られた。また比喩の対象としても使われるようになった。「鬼」に比喩される名詞は最初是否定的イメージだけであったが、時代とともに良い(肯定的)イメージにも使われるようになった。この際、「鬼のように〜」といった比喩表現が使用されるようになり、「鬼」に比喩される対象と直接結合する接頭辞的用法が現れるようになった。

このような接頭辞用法は近世以降から本格的に使用されるようになり、1990年以降、特定の世代が使う「若者ことば」として変化してきた。近代までの「鬼」の接頭辞用法は「鬼」に比喩される対象が名詞に限ったが、現代には名詞のほか、感情などを表す形容詞にも「鬼」を結合されるようになり、「とても」といった副詞的用法として使われるようになった。

「鬼」が若者ことばとして定着されるようになった要因は語彙の面白さや便利さなどが若者の文化に浸透して使用範囲を広めたからだと考えられる。

今後、本研究で対象とした「鬼」の他、若者ことばの「激」などの歴史的变化過程を考察し、若者ことばの意味用法の変化過程をパターン化していきたい。

Historical changes of the *Oni* used by the young generation

Lee, Jee-Eun

This paper describes the historical change of *Oni*, focusing on the development of language spoken by the younger generation, one of the linguistic phenomena of modern Japanese.

Oni first appeared as a noun with a meaningless spirit in the relative era. After that, the meaning was extended to the existence of tangibles in the middle ages, and it became an object of metaphor that 'like an *Oni*' was used.

A prefix directly combines with an object that is 'like an *Oni*'. This prefix began to be used in earnest in recent years; Particularly, it is a change of usage from the *Wakamono kotoba*, used by a certain generation after 1990.

In *Wakamono kotoba*, the adjectives expressing emotions were combined to use *Oni* as adverbs.

The reason why *Oni* was able to settle down in the language of the younger generation is because of the humor and convenience of the language has.